

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01636

研究課題名(和文) 運動・スポーツ実践での人間の生の経験を重視した新しい身体教育における人間形成

研究課題名(英文) Character building in a new physical education theory with the emphasis on our experience of being alive in sport and physical exercise

研究代表者

畑 孝幸 (Hata, Takayuki)

東海学園大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：00156332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スポーツ実践における人間の生の経験が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ち、児童・生徒の「心と体」の問題の解決に向けて体育に何ができるのか、その人間形成の可能性について検討する。運動実践やスポーツ実践における「他者との交流」や「コミュニケーション」から得られる多様な生の経験を、体育という人間形成の営みに取り込むことで、児童・生徒が直面する「心と体の問題」解決への方策を提示しうる新たな体育論の構築を目指す。そのため、人間的な実存レベルでの問いかけを哲学的人間学の立場から行いながら、「運動実践やスポーツ実践における人間の生の経験」を身体教育へ応用することについて考察する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的な特色は、「心と体」の問題が人間存在自体への問いと不可分であるという認識に立ち、人間を総合的に捉える学問である哲学的人間学の立場から、運動やスポーツにおける人間の生の経験とは何かということ明らかにすることである。体育における人間形成の意義や、体育が教材とする運動やスポーツの教育的価値について考察することも本研究の学術的な特色の一つである。体育学やスポーツ科学の分野では本研究の外に、運動やスポーツの意味を人間の生の経験から問うことにより、あるいは教育における人間形成と関連させて、体育において運動実践やスポーツ実践における人間の生の経験が持つ意義を明らかにしようとした研究はない。

研究成果の概要(英文)：In this study, based on the recognition that the lively human experience in sports practice is inseparable from the question of human existence, what can be done in physical education --its possibility of human formation-- is considered to solve the "mind and body" problem of pupils. By incorporating the diverse life experiences gained from "interaction with others" and "communication with them" in exercise and sports practice into the human development activity of physical education, we aim to build a new theory of physical education that can present measures for solutions of the "mental and physical problems" faced by pupils. Therefore, while asking questions at the human existential level from the standpoint of philosophical anthropology, we will consider applying "lively human experience in practicing exercise and sports" to physical education.

研究分野：体育学、体育・スポーツ哲学

キーワード：身体教育学 哲学的人間学 身体性哲学 人間の生の経験 人間形成

1. 研究開始当初の背景

学校教育の現場には出口の見えない難問が山積みであった。当時は「いじめ」や「暴力」が原因で児童・生徒が死に追いやられる悲惨な事件が繰り返し起こっている。体育との関連では、各地の中学校や高等学校での運動部活動における悲惨な「いじめ」や、児童・生徒を死に至らしめる体罰事件も後を絶たなかった。このような状況に置かれた児童・生徒は、学校における同級生や教師、すなわち他者との共感や人間的連帯を経験することができず、自らの学びも阻害されるため、「生きる力」を身につけることができなくなっていた。こうした教育の荒廃の背後にある「心と体の問題」に対応するため、体育は「心と体の密接な関連」という理念を追求することによって、児童・生徒が直面する問題状況の打破に貢献しようとしてきた。しかし、実際の授業における具体的な実践の場面では、何をどう指導すれば「心身の関連」が実現されるのかという戸惑いがあった。また、「心と体を一体として捉える」、「自分や仲間の体や心の状態に気付く」という場合の「捉える」ことや「気付く」ことについての哲学的問題の検討も不十分なままに残されてもいた。このような状況において、果たして体育に何ができるのか、それを明らかにしたいと思ったのが本研究の動機であった。

これまで体育は、常に社会的要請を受け入れながら、何がしかの人間形成を行ってきた。わが国でも、スポーツの人格形成の可能性を体育に適用する試みが早くからあり、体育で目指すべき人間像として、心身の調和が取れ、徳を身につけた人間の姿が描かれている(島田正藏. 體育原論. 大同館書店, p.23, 1926)。体育は、道徳の立場から「客観的存在としての人間を、最も健全なる状態に発育させる意識作用」(大西 要. 教育的體育學. 明治圖書, p.64, 1926)と定義され、「身体運動によって価値を創造する作用」(大西, 1926, p.64)であると考えられてきた。同様の考え方は現在にも引き継がれている(友添秀則. 体育の人間形成論. 大修館書店, pp.313-314, 2009)。欧米では、体育の教材となるスポーツを人間にとって価値ある実践として捉える研究(Arnold, P. "Sport, Ethics and Education". Cassel, 1997)や、スポーツにおける達成を哲学的人間学から解明する研究(Lenk, H. "Eigenleistung". Edition Interfrom, 1983; Lenk, H. "Die achte Kunst". Edition Interfrom, 1985)が注目を集めた。2000年代に入ると、これらの成果を踏まえた研究が、欧米のみならずわが国でも行われるようになり、スポーツの達成を人間形成と結び付けて捉える研究(Lenk, H. "Erfolg oder Fairness?". Lit, 2002)や、スポーツの危機を達成の次元から捉える研究(Sekine, M., & Hata, T. "The crisis of modern sport and the dimension of achievement for its conquest". *International Journal of Sport and Health Science*, 2, pp.180-186, 2004)が行われた。

研究代表者は、以前よりハンス・レンク博士(ドイツ連邦共和国・カールスルーエ工科大学・名誉教授)の協力を得て、スポーツが人間の生の経験に対して持つ意味を追求する研究(畑 孝幸, 関根正美. スポーツにおける人間の生の経験とそれを重視した体育における人間形成に関する研究. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書. 2009)を関根正美教授(日本体育大学)と共同で行ってきた。この研究成果は後に続く一連の科学研究費補助金を受けた研究へと受け継がれ、スポーツ実践における人間の生の経験を生かした他者との連帯に関する研究(Hata, T., & Sekine, M. Athletes' mental and inner satisfaction and their solidarity in modern sport. *2013 International Association for the Philosophy of Sport*, 2013)や、スポーツ経験における達成の重要性に関する研究

(Sekine, M., & Hata, T. What we can get in sports: Between victory and achievement. *Portuguese Journal of Sport Sciences*. 12 (Supl.), pp.164-166, 2012)として一定の評価を得た。しかしながら、スポーツを教材とする体育の授業場面において、運動実践やスポーツ実践で生じる人間の生の経験を、児童・生徒が実際の場面でどのように積んでいくかということについて、深く掘りさげて追究することができていなかった。

2. 研究の目的

そこで本研究では、スポーツ実践における人間の生の経験に関する先行研究の成果を発展させて、体育の授業において運動やスポーツを教材として実践するとき生じる人間(児童・生徒)の生の経験について考察し、体育における人間の生の経験を媒介にした人間形成の可能性を探ることを目的とした。この目的が達成されれば、体育の授業において、「心と体を一体として捉える」とはどういうことなのか、「自分や仲間の体や心の状態に気付く」ということはどういうことなのか、そういう問題の解明につながると確信したからである。

そういう意味で本研究は、運動やスポーツの技能習得や倫理規範の教育を中心としてきた従来の体育論を越えた新しい体育論を、哲学的人間学という視点から模索しようとする非常に先駆的な研究であるといえよう。同様の研究は、国内・国外にも例がなく、本研究は学術的にみても国際的に価値があり、非常に画期的で独創的なものである。

3. 研究の方法

本研究では3年間で明らかにすべき3つの研究課題、すなわち、(1)「他者との交流を必然とする運動・スポーツ実践における人間の生の経験とは何か」、(2)「運動やスポーツ実践における他者の体や心への気付きとは何か」、(3)「運動やスポーツによる人間の生の経験を伴う新しい体育における人間形成の可能性」を設定した。1年目の「他者との交流を必然とする運動・スポーツ実践における人間の生の経験とは何か」では、「自分自身の心と体を一体として捉える」、「自分や仲間の体や心の状態に気付く」ということを中心に1つ目の研究課題について考察する。2年目の「運動やスポーツ実践における他者の体や心への気付きとは何か」では、運動やスポーツにおける他者との交流を通じた人間の生の経験を考察することを中心に据えた。3年目の「運動やスポーツによる人間の生の経験を伴う新しい体育における人間形成の可能性」では、「いじめ」や「暴力」の被害に直面する児童・生徒の「生きる力」の養成に対して、体育は何ができるのかということについて、哲学的人間学の立場から研究を進めようとした。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

「他者との交流を必然とする運動・スポーツ実践における人間の生の経験とは何か」について、先行する研究成果を洗いなおし、新たな資料にもあたり、運動やスポーツが人間の生の経験に対してどのような意味を持つのかという原理的な問題について考察をすることで、運動やスポーツを実践することの人格形成的意味との関連から、運動実践やスポーツ実践における人間の生の経験や、運動とスポーツの教育的価値を再確認することができた。その結果、運動やスポーツを教材とする体育でなければ成しえない人間形成の意義を明らかにすることができた。この結果は学校教育における体育の存在価値を強固にするといっても過言ではない。

「運動・スポーツ実践における他者の体や心への気づきとは何か」、「運動やスポーツに

おける人間の生の経験が体育においてどのような意義を持ち得るのか」ということについて考察し、「運動やスポーツにおける人間の生の経験を伴う新しい体育における人間形成の可能性」を明らかにした。この結果は、学問的に専門分化した体育学が、その中心に『心と体』を育む」ということを据えることで、体育学そのものを統合するためのアイデンティティーを確立し、飛躍的に発展することに大いに寄与することを示唆している。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で得られた成果は、国内外における学会大会で発表し、学術研究誌にも掲載され、広く公表された。それらは人間の生の経験という新しい視点から運動やスポーツを捉えることや、そのように捉えた運動やスポーツを教材とする体育を扱うという視点からまとめられたもので、この点に本研究の独創性とインパクトを見出すことができる。

(3) 今後の展望

3年目は最終年度であったが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により計画通り研究が進まなかった。そのため1年の研究期間延長と研究分担者の追加を申請した。これが認められたことにより、少しは研究の遅延を取り戻せたものの、その後も新型コロナウイルス感染症の蔓延は収束することなく延長期間が経過した。当初に予定していた計画通りに研究が進まなかったことが悔やまれる。とりわけ、本研究で得られた知見を実際の教育現場に落とし込む作業ができなかったことは非常に残念であるが、これは今後の課題として留めておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒牧亜衣, 佐良土茂樹, パトリック・グリュネベルグ, 関根正美, 畑 孝幸	4. 巻 51
2. 論文標題 「主体としての身体」からこれからのスポーツを展望する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育哲学年報	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田もか, 高橋浩二, 河合史菜, 峰松和夫, 溝上 元, 森 小夜子, 若杉一秀, 岩本あさみ, 橋田晶拓, 宇野将武	4. 巻 7
2. 論文標題 体育科・保健体育科における運動観察能力のポイント化の必要性 思考・判断し、表現する能力の育成に向けた運動学習を目指して 3. 雑誌	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田もか	4. 巻 19
2. 論文標題 バレーボールにおけるスパイクの技術改善に向けた授業実践の一事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 長崎大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 207-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田もか	4. 巻 22 (1)
2. 論文標題 体育授業におけるバレーボール指導のための基礎的研究 スパイクの指導法を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 バレーボール研究	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Aramaki, A., Hata, T., Sarodo, S., Grueneberg, P., Sekine, M., & Hata, T.
2. 発表標題 Prospects of sport through the viewpoint of body as subject (General Symposia W01-PS14)
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田もか
2. 発表標題 スパイク技術指導ポイントと大学体育授業における学習者の理解度
3. 学会等名 日本バレーボール学会第26回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sekine, M., & HATA, T.
2. 発表標題 Anthropology of solidarity: From defeat to existential solidarity
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy (Section for Contributed Papers). Beijing, China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hata, T.
2. 発表標題 Sport and the meanig of life
3. 学会等名 24th World Conress of Philosophy (Society Sessions). Beijing, China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hata. T., & Sekine, M.
2. 発表標題 Research interests and methodology of sport philosophy in Japan from the 1970 's to the present
3. 学会等名 47th Annual Meeting of the International Assosiation of for the Philosophy of Sport. Oslo, Norway (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hata, Takayuki
2. 発表標題 Inner awareness and self-cultivation of sport: In the context of the way of thinking in Zen philosophy
3. 学会等名 46th Annual Meeting of the International Conference of Sport Philosophy, Langara University, Wistler (Canada) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hata, Takayuki
2. 発表標題 Philosophy of sport and physical education in Japan for the last four decades
3. 学会等名 2017臺灣國際運動哲學學術研討會, 國立臺北教育大學, 台北 (中華民國) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ハンス・レンク, 畑 孝幸, 関根正美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 不味堂出版	5. 総ページ数 163
3. 書名 スポーツと教養の臨界 身体価値の復権	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	久保田 もか (Kubota Moka) (80744721)	長崎大学・教育学部・准教授 (17301)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	レンク ハンス (Lenk Hans)		海外共同研究者

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The 47th annual conference of the International Association for the Philosophy of Sport	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	國立臺灣大学			
ドイツ連邦共和国	Deutsche Sporthochschule Koeln	Karlsruher Institut fuer Technologie		